

オリオリ vol.49

2018 / 春号

一年一年、重ねてきた年輪が

豊かな実りを支えています。

特集1 食の考現学

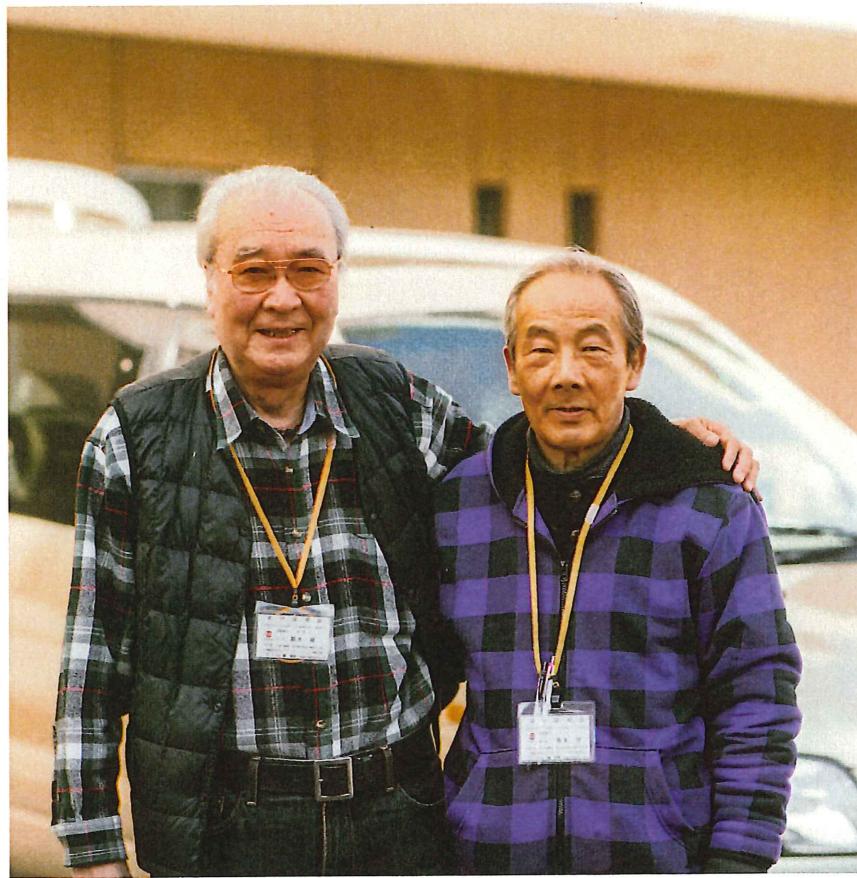
人生100年時代に 「食を担う」ということ

忘れられない味／せなけいこ 日々、ときどき美味／石田 千

ニチレイ“力”的舞台裏

機械と人智のタッグで、
正確・迅速な食品物流を実現

大谷さんと語ろう！ 第6回 達人、大集合！



鈴木 靖さん・78歳 すずき・やすし (写真左)

特別養護老人ホームマザース日野
配食ボランティア コーディネーター

配食ボランティア以外に、地域の貢献活動にも参加。誰もが
「リーダー」と呼ぶ兄貴的存在だ。好きな食べ物は、和食全般。
写真右は、同ボランティアで共に活動する板東学さん。

Part.2

運ぶ

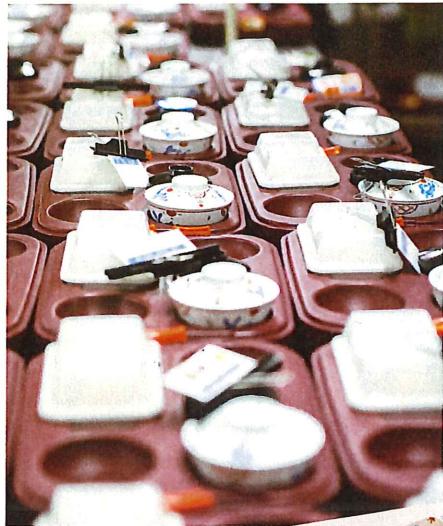
頼つてくれる人が
いる限り食事を届けたい

特

別養護老人ホームマザアス日野（以下、マザアス日野）が、日野市からの依頼を受け、高齢者への配食サービスを始めたのは13年前。65歳以上の1人暮らしなどで、日ごろの食事をするのが難しい人に食事を届けるサービスだ。地域の高齢者を支えるこのサービスには、配達を請け負うボランティアの存在が欠かせない。開始当初からボランティアに参加する鈴木靖さん。活動の源には特別な思いがあつた。

◆ ◆ ◆

届ける食事は1日平均60食。多いときは70食を超えるときもあります。それを5人のボランティアが、昼食に間に合う



利用者に合わせて、おかゆやペースト状など調理具合まで配慮された食事。配達間違い防止のため一つひとつ、ネームカードで管理される

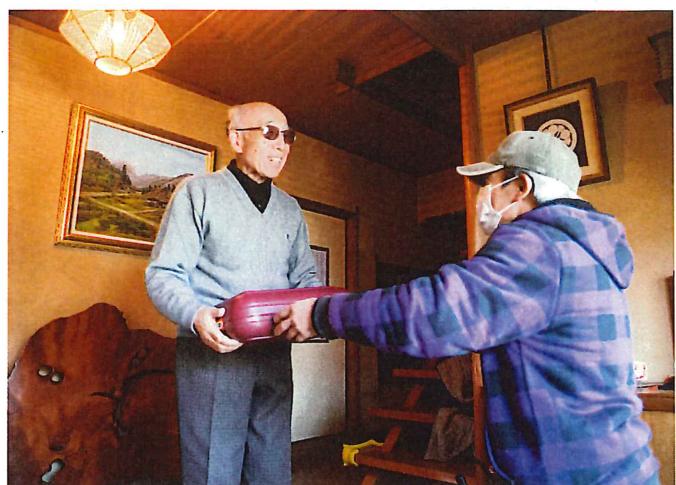


車に食事が入ったケースを積み込む板東さん

よう届ける。以前は私も配達を担当していましたが、今はコーディネーターとして、総勢16人のボランティアのシフトを作成したり配達内容を管理したり、まとめるようなことをしています。

届け先には、寝たきりの人から記憶がおぼろげな人まで、さまざまな事情を抱えた人がいます。だから、何より重要なのは見守りを兼ねた安否確認だと思ってるんです。本来、配食サービスは玄関先まで食事を届けるだけでもいいのですが、私たちもベッドの脇まで食事を届けることもあります。というのも、「玄関で声を掛けても、返事がない」なんてことも頻繁。配達時に倒れている人を発見して、救助したこともあるんですよ。

私はサラリーマン生活を40年。役職にも就いて働き続けることができたのですが、母の介護をきっかけに退職したんですね。介護は本当に大変でしたけど、生きがいにもなっていましたんでしょう。母が他界したとき、介護施設の手助けができるべと考へるようになつていきました。長年一緒にボランティアをしている板東さんにも「リーダーがいなきや続けてないよ」なんて言われて。マザアス日野のセンター長や栄養課長、みんな、何かあると私に電話をかけてくるんです。この歳になつても頼つてくれる人がいるなんてうれしいじゃないですか。自分のため、人のため、頼つてくれる人がいる限り、続けていこうと思っています。



サービスを利用して3年になる、矢澤寛さん。「いろいろ試したけど、ここの食事が一番。もう他には替えられないよ」と笑顔を見せた